

未来を予見させる新進女流画家

古河原泉展

Color of desire Version. II

【会期】

4月11日(土)～4月19日(日)
10時～19時30分 会期中無休

【会場】

Bunkamura Box Gallery
渋谷区道玄坂2-24-1
03(3477)9174

「生かされた華II」(部分) 油彩、キャンバス 100号 F

人間の内面に迫る絵画



Izumi Kogahara

栃木県宇都宮市生まれ。2000年宇都宮大学教育学部美術科卒業。同年、栃木県芸術奨励賞受賞。03年から光風会に在籍、04年日展に初入選、以降07年から13年まで7回入選。2013年初個展(Bunkamura Box Gallery)、その他、有名百貨店、ジオブセッションギャラリーで個展開催。現在無所属。

初個展以来、注目度を高めている古河原泉の新作展が開催される。今回の出品作を見ると、これまでの女性像との微妙な変化に気づく。

そのひとつは、色彩がより輝きを増してきたことだ。十二色環を自由に使いこなし、画面は、教会の内部を彩るステンドグラスのような、精神性の宿った不思議な光を秘めている。

「変化を続ける日々の中で、そのときその瞬間に感じるリアルタイムの視点・感覚をもつて表現していれば、おのずと生きた色彩の世界を作り続けることができる、そう信じています。それがネガティブな印象の色彩だったとしても、その時の感覚に正直な結果であればそれでいい、それでこそ生きた色彩であると思うのです」

ある時は情熱的に、またある時は瞑想



「祈りうららか」ミクストメディア、紙 74×55cm

的に。彼女の言う「生きた色」は、それ自体で人の感情を暗示し、ストーリーを生み出している。

ふたつめに気づいたことは、これまでが力強さが強調されていたが、今回は女性達の表情や仕草がしなやかになり、エロティックな香りを放ち始めたことだ。

「これまでは、女性の内面の強さをそのまま表現しなかった。でもそれには、限界を感じたのです。人の根っこにある清く澄んだものを、もつともっと深いものとして表現するには、その対極にあるような要素をぶつけていくことではないかと気づいたので。それが私にとって、これまで避けていた『女性らしさ』や『エロティックさ』等の要素でした。その要素をぶつけ、より人らしさのある内面に食い込んだ表現をすることが、今回の展覧会でのチャレンジです」

線に思いを込めて描くというドローイングでは、瞬間の発見を切り取り、一方タブローでは、そこに色彩を盛り込んで追求、実験をするという古河原。

「生かされていることの本当の意味とは何だろう」と考え、日々、キャンバスに向かう彼女にとって、制作はすべて「過程」であるという。つまり作品とは、作業の結果ではない。そこで完結するものでもない。キャンバスは、生きている彼女の心の揺らぎを映し出す、生きたスクリーンである。

静止した絵画でありながら、古河原の絵の中は何かがつもつこうこめいている。未来に対する予感と、計り知れない潜在力を抱えた新作群に、是非期待したいと思う。

(編集部)